

# 箏奏者と演奏する児童の「音楽づくり」による日本音楽理解

大阪芸術大学 初等芸術教育学科 准教授 津田奈保子

## 1 問題の所在

近年、自国文化を再評価する社会的要請の高まりを受け、学習指導要領（1）の改訂により、小学校音楽科における和楽器学習は一層重視され、指導学年の低年齢化も進んでいる。しかしその一方で、和楽器の演奏経験や専門的な教授法に習熟した教師は必ずしも多くなく、授業内容が鑑賞活動に偏る傾向も指摘されている。結果として、児童が和楽器を主体的に扱い、音楽を創り出す学習機会は十分に確保されていないのが現状である。

桂（2）は、伝統音楽を完成された固定的な文化として伝達するのではなく、音楽が生み出される過程を体験する「発生的方法」によって創造性を育成できる可能性を示している。また、ブラッキング

（3）の音楽観に基づけば、音楽は作品そのものではなく、人間の行為や身体を伴うプロセスとして捉えられるべきであり、体験を重視した学習の重要性が示唆される。そこで本研究では、児童が自ら音楽を創り上げる過程を重視し、箏奏者と共に演奏する授業実践を通して、日本音楽理解における教育的意義を検証することを目的とする。

## 2 研究方法

### 2-1 実践方法

本研究は、小学校音楽科において箏を用いた創造的音楽学習の実践を行い、日本の音楽的特質に対する児童の理解の在り方を明らかにすることを目的とした。実践は45分授業を4時限実施し、題材名を「日本の音階を感じて箏を弾いてみましょう」と設定した。

第1時では、箏に関するクイズや箏奏者による演奏鑑賞を通して、楽器への興味・関心を高めた。その後、柱を立てない状態で弦をはじき、音の高さや響きの変化を体験的に探究させ、音程がどのように生み出されるかを理解させた。

第2時では、日本の音階に調律された箏を用い、使用する弦を限定した上で、児童一人ひとりが8拍の旋律を創作した。創作した旋律を持ち寄り、グループで音楽を構成する活動を行った。

第3・4時では、箏奏者が授業に参加し、児童と役割分担を行いながら即興的に音を重ねる活動を行い、日本音楽特有の構造や響きを、演奏を通して体験的に学習させた。

### 2-2 実践の分析方法

分析に先立ち、児童の日本音楽に対する認識を把握するため、アンケート調査を実施した。音楽づくりの分析では、児童および奏者の演奏を記譜した楽譜を基に、都節音階に特徴的な短2度音程の出現頻度と、核音への終止傾向に着目した。さらに、授業後の自由記述を用いて、箏を用いた協働的音楽づくりの意義を考察した。

### 2-3 倫理的配慮

本研究では、事前に保護者へ研究内容および撮影の目的について説明し、文書による同意を得た。また、児童本人にも研究の趣旨を説明し、個人が特定されない形で資料や映像を取り扱うなど、倫理的配慮を徹底した。

## 3 研究結果

本稿では「日本音楽」を、明治以降に受容された洋楽を除く古典邦楽・現代邦楽・民俗音楽を包括する概念として用いる。日本音楽の定義は多義的であるが、本研究では小泉文夫の四種の基本テトラコルド理論に基づき、日本の音楽らしさを捉える。本実践で用いた箏は都節音階に調弦されており、短2度音程と核音の存在が、日本音楽特有の響きを特徴づける要素として位置づけられる。（4）

事前アンケートでは、「日本の音楽を知っている」と回答した児童は35.1%にとどまり、《さくらさくら》以外の唱歌も日本音楽として認識されるなど、日本音楽に対する概念的理解の曖昧さが明らかとなった。音楽づくりでは、〈繰り返し〉を用いたグループで演奏の安定感が高まる一方、繰り返しを用いないグループでは短2度音程の出現が多く、都節音階らしさが顕著に表れる傾向が見られた。核音への終止が確認できたのは約半数であり、理解には個人差があることが示唆された。

さらに、箏奏者との協働演奏により、日本音楽特有の構造や終止感が明確となり、児童は日本音階らしさを体験的に感受していた。

## 4 総合考察

本研究より、児童は日本音楽に対する理解が必ずしも十分ではなく、体験的学習の重要性が改めて示された。箏を用いた創造的音楽活動では、日本音階らしさの表出に一定の限界が見られたものの、箏奏者との共演を通して、日本的な響きの感受が促進された。鑑賞にとどまらない協働的音楽づくりは、日本音楽理解を深める上で有効な学習形態であると考えられる。今後は、段階的な日本音階提示と継続的な実践を通して、試行錯誤を伴う学習構成の検討が課題である。

## 5 引用文献・参考文献

- (1) 文部科学省 平成29年『学習指導要領 音楽科』
- (2) 桂直美(2004)「伝統音楽教育における「発生的方法」の可能性—澤井一恵の箏の授業の分析を通して—」三重大学教育実践総合センター紀要, 第24号, 76頁
- (3) J. ブラッキング『人間の音楽性』岩波現代選書
- (4) 小泉文夫『日本伝統音楽の研究』音楽之友社

【謝辞】箏奏者は演奏学科の志村智恵子先生にご協力頂きました。感謝申し上げます。